

<b>Title</b>	カラーリング・ザ・フィールド：ジェンダー・「人種」・フィールドワークの政治学
<b>Author</b>	コバヤシ, オードリー / 大城, 直樹[訳]
<b>Citation</b>	空間・社会・地理思想. 2 巻, p.98-106.
<b>Issue Date</b>	1997
<b>ISSN</b>	1342-3282
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	Professional Geographer, 46, 1994, pp.73-80. / ©1997 by Blackwell Publishers
<b>DOI</b>	

Placed on: Osaka City University

# カラーリング・ザ・フィールド<sup>訳注1)</sup> —ジェンダー・「人種」・フィールドワークの政治学—

オードリー・コバヤシ\*  
(大城 直樹\*\* 訳)

Audrey KOBAYASHI  
Coloring the field: Gender, "race," and the politics of fieldwork  
*Professional Geographer*, 46, 1994, pp. 73-80.  
© 1997 by Blackwell Publishers

## 摘要

日系カナダ人コミュニティ内における調査研究と政治的活動を結び付ける私の経験は、人種差別や性差別によって周縁化された人々のうちにおける研究=著述 work の政治学に対するフェミニストや反人種差別の立場に立つ研究者たちの関心の高まりを反映するものである。このような関心は、「他なる声」に耳を貸し、しかもある個人や集団が別の個人や集団を表象することの正当性が吟味されるようなコンテクストのなかであらわれてきた。これらを吟味することは本質主義と自然主義に対し政治的・理論的に取り組むことでもある。ただし、抑圧的な状況に取り組む際に、そうした状況を立ち現せしめる本質主義的なカテゴリーを用いざるを得ないという皮肉な困難も存在する。そのために、政治的構築物に対する批判的な理論が要請されるのである。

キー・ワード：人種差別、本質主義、自然主義

学者であり政治的活動家でもある私の生活はここ十几年来、ますます分け難いものとなってきた。日系カナダ人 Japanese Canadian の学者としてアカデミックなキャリアをはじめた私は、今ではジャパニーズ=カナディアン Japanese-Canadian の学者と自らを定義している。意味上の違いは僅かのように見えるけれども、私自身の生活と研究における大きな転換だけでなく、フェミニスト的・反=人種差別的な学問領域における転換、またそうした学問領域が社会的成果をもたらす可能性における転換をも反映しているのである。政治と（ここで）いうのは単に個人的なものだけでなく、アカデミアとアカデミアが自ら再現=表象すると称する人々の生活との間の障壁を脱構築していくことにコミットすることでもある。このことは私の研究の仕方に深く影響を与えた。

自らをフェミニストとか反=人種主義者と名乗る地理学者は十年前にはまづいかなかった。実際、この学科 discipline のなかには女性や非=白人、ゲイ、レズビアンはほとんどいなかったのである。この周縁的な人々の複合体のいずれかに振り分けられたわれわれは、そのアイデンティティ上のハンディキャップを、主流派にフィットさせ熱心に真似ることで克服しようと試みてきたのであった。時代が変わり、女性や有色者やゲイやレズビアンとしてではなく、研究者として、われわれがそのハンディキャップにもかかわらず、もっと受け入れられるようになることを望みながらである。ある者たちはそうした周縁的な「ハンディキャップ」を利用したけれども、それは知識人にありがちな異国趣味の空間のなかでの話に過ぎなかった。

しかし時代は変わってきた。今日では大きく受け入れられているのだ。このことはアカデミアのメンバーシップの障壁の引き下げに表わされている。（ゆっくりとではあるが）人数の上で代表者の方へと転換してきていることだけでなく、社会的周縁化に関する学問

\* マギル大学地理学部助教授(Ph.D. UCLA)。ジェンダー・人種差別・人種・移民の問題に関わる研究と政治的活動を行っている。

\*\* 神戸大学文学部

領域では、それが知的貢献だけしか果たしていないということについては真剣に取り上げられねばならないが、過去十年間にまったく驚くべきかつ歴史的に前例のないほどの発展をみたのである。しかし、今やディシプリンの守護者たち（いまだに多くは白人男性であるが、態度一切新しいリベラル層もいる）は、これが単に平等の問題を指しているだけではないということに困惑している。仮に平等ということが、過去の人種差別的・性差別的な標準にあわせて線引きを行ってきた枠のなかに、枠外に追いやられていた人々が入ってくるのを許すという意味であったとしても、この問題は換言すれば、新しい力強い声とともに静けさが破られるといった、周縁から中心への移動のことをいっているわけではないのである。（そうしたプロジェクトを否定するつもりはないが）もっと包括的にこの枠を引き直すことだけが問題なのではない。その当の枠を消去し、社会変化の解釈の手段としてだけでなく、社会的変化をもたらす手段として、学問的な努力を再定義することが問題なのだ。その過程においては、われわれが学問的「長所」の標準を判断してきた規範は疑われ続けることになるだろう。旧い男性中心の諸規範はいよいよ欠陥物として見いだされていくことになるのである。

フェミニストの研究者たちは、アカデミアの規範に異議を申し立て、社会的変化の実現のために助力することによって、政治的にコミットするべく、自身の研究を用いることに気後れせず、かえってそれらを前面に押し出してきている（Rose, 1993）。反=人種差別的な学者たち——その研究の多くは自身の可視的な少数者コミュニティ<sup>註2</sup>に関するものである——は、人種差別克服の闘争を、人種差別を発生せしめる社会的規範と社会的実践の変質であり、同時にまた彼/彼女ら自身の変質 transformation であるとも考えている。非白人のフェミニストの女性にとって、変化を起こさせしめるこの力を得て実現化していくこととは、彼女たちの行動能力と行動への意志を変質することでもある。彼女たちは過去には話されも聞かれもしなかった言葉を自ら語ることによって、ディシプリンとその社会的世界を変化させていく責任と能力を要する立場にあることを理解するのである。

ある者は、彼女らを表象=代行する白人の中産階級の女性の権威に異議申立てを行うために、さらに先へ

と突き進む。周縁部に取り残された人々について語る際に、（その人々以上に(?)）権力を有するフェミニストたちの主張を人種差別的だと指摘するのである。そのもっとも顕著な例である、ベル・フックス (hooks, 1992) やガヤトリ・スピヴァック (Spivak, 1988)、オードリー・ロード (Lorde, 1984) らの思想によって示されるこの挑戦は、フェミニズムの理論的水準においても政治的实践においても、フェミニズム運動の内部を鑑定することで経験される、信念=信頼 faith に関わるおそろくもっとも深刻な危機に結果したのであった。ラジカル・フェミニストと社会主義フェミニストとの討論、あるいは資本主義の突出と父権性をめぐる討論のごときは、何を語っているかということだけでなく、ヒトが語るまさにその権利をも疑う近年の問題発展からみれば、単にサロンのな黙想に過ぎない。これに伴い幾人かの女性——そして男性の——研究者は、彼/彼女ら自らは何の社会的クレームも持たない領域のなかに自身を置く研究、あるいは社会的代行=表象に関わる彼/彼女らの信任状に疑問が付されてしまうような研究から完全に撤退してしまった。以下、この問題について議論してみたい。

概して、私はこうした異議申立てに賛成である。仮に限られたコンテキストのなかであったとしても、周縁化された人々の声が最終的に真剣に捉えられるようになるからであるし、多くの人が政治的な能動者となることに力を貸すことになるからである。それは、フェミニズムが人種差別主義に、また反=人種差別主義が性差別主義に化してしまう限界を、また両者に対してともに批判的なまなざしが向けられる必要のあることを明らかにすることで、多くのフェミニスト研究者及び反=人種差別的研究者のもつ独善性を払いのける (Kline, 1991; Brah, 1992)。それは「人種」と女性性に関する本質主義的・普遍救済説的な考え notion に異議申立てを行うことによって (Haraway, 1989, 1991; Spelman, 1990)、またわれわれの視角を先進工業国から発展 (途上) のコンテキストにまで広げていくことによって (Mohanty, 1991; Mukherjee, 1992)、われわれの理論的アジェンダを豊かにする。そしてそれは、中立的で距離を置いた detach 立場という神話を疑うことによって、またわれわれが研究を行っているそのコミュニティに敬意を大いに払うこととそのコミュニティとコネクションをとる必要性を奨励することによつ

て、われわれが行おうとするフィールド調査の方法をも変えたのである (Hondagneu-Sotelo, 1988)。私はこの結果が、フェミニズム的、反=人種差別的学問領域の強化につながるものと確信しているが、そのプロセスは矛盾と敵対と逆説を伴った困難なものである。そして私が自らの研究を位置づけようと思うのは、この骨の折れる対立的なゾーンなのである。

### 誰が語っているのか？

(自己を語るための) 声と著者=権威性 authority に関する近年の討論 (Miles and Crush, 1993; McDowell, 1992) は、私が私のアカデミックな目的とコミュニティでの活動とを調整する政治的な努力に関わっていたときに行われはじめた。実際、私には、フィールド調査と活動の二つを区別することなどでできなかった。例えば、日系カナダ人の国家代表として、1940年代に行われた人権侵害に関する賠償事業の交渉に携わっていた間、私は人種差別を受けた少数者を代表して、実際に語る権利のために闘っていた。が、同時に、少数者の集団が、彼/彼女ら自ら代表=表象する力を獲得するような国家と市民社会の関係についても書いていたのである (Kobayashi, 1993a)。私はまたコミュニティ内部で、女性に (自ら語るための) 声を与えるための闘争とフェミニズム的分析の原理を交渉のテーブルにまで拡張する——そうすることで結果だけでなく、交渉が発生するような言説形態にも影響を及ぼすことになる——ための闘争にも関与していた。ジャパニーズ=カナディアン女性として、ジャパニーズ=カナディアン女性の利害=関心を私が代表しているという知を確信しながら、その問題を「誰が誰について語るのか？」ではなく「誰が語っているのか？」と規定したのであった。と同時に学者として、コミュニティの利害=関心のために私が受けてきたトレーニングを活かそうと思っただけでなく、直接的な経験を通して、私の「知」の学問的な基盤を強化しているとも感じていた。地理学者として、私は社会=政治的闘争のための基点としての場所の決定的な重要性について探求していたのだ。

もし政治的なものと学問とを結び付けることが目的なら、このようなコミットしたフィールドワークは非常に効果的だろう。私自身の文化的コミュニティのな

かで活動することで、私は、妥当性・アクセス・文化的実践に関する内部者の見方・政治的目標の達成の潜在的可能性を、より実際に獲得したのであった。政治的活動は、社会的プロセスに関する私の研究者としての理解を、距離を置いて行う分析では為し得べくもないやり方で豊かにした。さらに言えば、地理学者たちは、空間の共有を含むすべての社会的な問題に関する地理的根拠 basis の広範な公的理解に貢献することができるのである。

しかし著者=権威性 authority の問題は、フェミニストたちに戦線の背後から異議申立てを行ったのと同じ仕方でも、フィールドの私にも忍び寄ってきたのである。賠償運動に関与していたわれわれは、この運動が単に特定の間人集団への人権侵害の賠償を目的とするだけではないというメッセージを展開することに一所懸命であった。われわれは、あらゆる少数者集団に、彼/彼女ら自身が語る権利を与え、もっとも広い意味においてまた多くの形において、人種差別を克服する権利を与える結果になるのでなければ、われわれの努力からはごく限られた結果しか得られないものと考えていた。われわれはカナダ政府が日系カナダ人の侵害についてのみ悔恨の意を表わすだけでなく、ジェンダー、人種差別、セクシュアリティ、ないしはこれらの結合形態や他の差別的構築物への無配慮からくるこうした侵害が、あらゆる集団に対して、決して再び起りはないということを知りたかったのである。しかしながら、われわれの道徳的目的が (1983年段階で) 達成することで、他の人種差別を受けた集団のみならず、われわれ自身のコミュニティの多くの構成員の見解のなかで、われわれは周縁から中心へと押し出されてしまった。そのことへの用意を、われわれはまだ行っていなかったのである。われわれは、われわれの政治的同一 identification のイメージとは別のものとして構築されたことで、中心化と周縁化をめぐる地理的布置の驚くほどの流動性を学んだ。この目的が達成したことによりわれわれは、いくつかの他の集団から、もはや人種差別された少数者の集団内のメンバーシップを合法的に主張することができないというメッセージを受け取った。事実、抑圧者のランクにわれわれは加えられてしまったのである。コミュニティの内部では、多くの人々が自らの個人的な補償を獲得したことで、戦争は終わったと感じていた。人権プロジェクトにまで継

続的に拡張しようという義務感などなくなってしまった。厄介なことに、問題の解決が、彼／彼女らが優勢な集団に属しているという感覚を正当化してしまったのだ。さらに、ジャパニーズ＝カナディアン<sup>2</sup>の女性によってつくられた勢い momentum は、われわれが政治的対決の上位の側にシフトし、コミュニティを維持することに改めて関心を払うにいたったことで減衰させられてしまった。また、われわれの中流化及び他集団との結婚が一層進んでいくようになると、「同化」と「民族的アイデンティティ」の保持——両者ともイデオロギー的権勢に関わる本質化された社会的構築物に依拠している——の間で行われる闘いの陰に身を置いていくことになるわけで、人権というアジェンダを維持していくことはなおさら困難になっていくのである。

このような展開は、多くの点において、新しいわけでもないし驚くべきことでもない。というのもこれは、内的な矛盾の上に生い茂っている人種差別と性差別の不朽の特徴に他ならないからである。ある領域 area において勝ち得ることができたということは、関心を単に別のものにすばやく転換させるだけでなく、それらの結果を新たな状況に移し変えるための潜在的な力を減じせしめる反動 backlash をもつくりだしてしまう。人種差別や性差別への抵抗は、分割された労働市場を通じてであろうと父権性によって押し付けられた感情的な反駁を通じてであろうと、新しい環境に適合しようとするほぼすべての社会的支配形態の力 power によって抑制されてしまう。性差別と人種差別はフレキシブルな現象であって、それらの効果は驚くほどの持久性を持っている。

しかしながら、フェミニズム内部における近年の正当化の危機という見地からすれば、こうした状況の解釈は、新たな振じれを帯びることになる。というのも、この状況に関する分析上の位置を確保し、色<sup>race</sup>が共通の目標を達成する際の障壁となってしまうような袋小路を避け、効果的な政治的提携を打ち立てるといふ、この三つの目標を達成するためには、差異が社会的構築物のあらゆる段階につくられていくプロセスを考慮に入れた戦略を取る必要があるからである。われわれはまさにわれわれが脱構築してこうとする差異の諸領域 realms によって分割されているのである。新たな反＝人種差別的・フェミニストの言説形態は、古い支配形態によって構築された形態 forms をもつわ

れわれの望みよりさらに多く共有されることになるかもしれない。こうした言葉に積極的に関与していく engage ことは、昨今「表象の政治学」と呼ばれるものに関わるいくつかの深刻な問題を問い質すことでもある。これに対する回答は、距離をとって対象と接し得るという学問遂行上の神話に退行していつては見出されるべくもない。むしろ、批判的分析の限界 margins を押し開いて進んでいくなかで見出されるのだ。

この状況 situation の二つの局面について手短かに探ってみようと思う。はじめのものは、そのひとの正当性 legitimacy が疑問視されるだけでなくコンスタントな修正対象となるような状況のもとにあって調査を行うという実践的なポリティクスに関わるものである。この状況とはつまり多様な声や変転する視角に対するポストモダン的な関心が真剣に取り上げられるべき状況であるけれども、不断の容赦ないプロセスとに、アイデンティティのズレが引き起こされているような状況なのである。二番目のものは、このジレンマを発生させているに違いない本質主義と自然主義の理論的／イデオロギー的問題に関わるものである。

### 誰が誰と話しているのか？

「誰が誰について語っているのか」という質問は、白人女性と非白人女性間の力の配分と、非白人女性が彼女らが継続的に周縁化されている状況下にあって政治的目標を達成する可能性、この二つに関するいくつかの重要な問題を提出している。さらに言えば、この問題は白人女性研究者が非白人女性研究者を支配する dominate その仕方に限定されるものではなく、教育や職業的地位といった中産階級の贅沢を手に入れることに関する、より広い問題にまで拡張される。それらは、どんな背景を持っていようとも、いまだ大部分の女性にとっては相対的に手に入れ難いものなのである<sup>2)</sup>。

痛みを伴う反省なしにというわけにはいかないが、解決は、専門的な調査目標を政治的変化のための行動 commitment にリンクさせることによって、ある水準においては起こる。社会的な力のバランスを転換しようとする政治的活動が、差異化する力の側からはじめられるという不幸な皮肉からわれわれは逃れることはできない。そればかりか、調査主体／対象といった複雑な状況が価値中立的に存在することなど不可能という事

実からも逃れ得ないのである。明白にそうであろうとなかろうと、社会調査とは政治的なものなのである。この状況は関与 involvement と表象のポリティクスを分析するための出発点となる。われわれはそこでわれわれの権力的地位や著者=権威性が調査を進める権利を否定するものかどうかではなく、むしろ社会的目的のためにいかにしてわれわれの特権を用いるのかを問うことになるだろう。

フェミニストの研究者にとって、関与のポリティクスは、(理想的には)相互の関心と信頼のひとつとして、他者との関係を組織化する調査方法を要請するものである。自身のキャリア向上のための手段にしたり、「問題」をもった集団に援助の身振りをすることで庇護者ぶることを一義的に意図するような調査プロジェクトを構築していくことによって、どんな目的も果たし得ないものと私は確信している。多くのフェミニストたちは出世主義を否定するが、近年の正当化の危機につながるような、他者に貢献するためのわれわれの能力についてのナイーブな仮定は、しかしながら存在している。相互の尊敬と関与、責任の共有、差異の評価、目的達成のための非階層的方法を強調するフェミニストの手法は、単純あるいは皮相な順応の身振りではないし、オルタナティブな方法論といったものでもない。その手法は、政治的変化へのアプローチを規定するものである。それらは「誰が誰と話しているのか？」という問題を提起する。この疑問はわれわれがフィールドに入る前から生じているし、また、われわれがわれわれ本人 subjects を社会的参与 engagement の空間に関与させることで、われわれとともに残されるのである。

表象=代行のポリティクスはさらに一層ホットな問題領域においても見出される。表象=代行という行為は文化的意味と社会的結合の網の目を用いる政治的な行為である。この行為が、人を、その網の目のなかに、コンテクスト的に規定された変化を起こす能力とともに定位するのである。この点において、力 power は条件づけられている。そして、表象=代行の力をいかにして追い散らすかをめぐる決定 decisions が、ある人々の広がり、関与の枠のなかへの参与を通して、幾分か慎重に行われるのである。表象=代行に関する近年の討論は、いかに特定の活動家たち actors ないしは活動家たちの集団が社会的フィールドのなかで条件付けら

れており、社会的フィールドに向けて活動する力を与えられているのか、とをめぐる争いも含んでいる。政治的な目的は、表象がこうしたあらかじめ力を与えられていない人々に声を与えるために用意されたときにのみ達成されるのである。言い換えるならば、非白人の女性が非白人の女性について語り、そしてともに語るということが重要なのだ。

しかし、正当性と表象の問題に取り組む際に思い起こされるべきは、彼/彼女らの色ではなく、周縁化された集団のメンバーとしての彼/彼女らの歴史と集団内における現在の役割なのである。色を基盤にした標準=基準について交渉していくことは、滑りやすい slippery (不安定な、つかみどころのない) 斜面上で議論することを意味する。肌の色がより黒いか白いかによって多少とも有利になるのだろうか？ 階級や教育や職業資格を彼/彼女らが取得することによって、一方的にそれらの権威は低められるのだろうか？ そうして、周縁化された人々は彼/彼女らの関心に声を与えられた段階で沈黙してしまうのだろうか？ もちろんそんなことはない。しかしこの滑りやすい斜面に乗り出そう embark とする傾向(主旨)は、仮に傾斜面の基部 base に限られたものであったとしても、抑圧のヒエラルヒーとそれにはめ込まれることで生じる無力感=麻痺をつくっていくことにつながっていく。個人の personal 属性は切り分けられ隔離されてしまう。他者との紐帯とコミュニケーションをつくっていく代わりに、われわれは差異の障壁をつくってしまうのである。差異は本質的な条件=状況となり、結びつくこと以上に距離を置くことの方が地理的現実となってしまうのである。

この特定のジレンマは、決して容易にはないものの、共通性が常に部分的なものであり、差異が人種差別や性差別から結果した歴史的な条件=状況であることを認識するよう、差異にはなく共通性に関心を向けることによって、回避される。フィールド調査も理論的分析も、差異を本質化することよりも共通性を築き上げていくことの方に、得るべき多くのものを有しているのである。

### 本質主義と自然主義

人種差別と性差別は、「人種」とか「性 sex」と

いった根拠にもとづいて人々のカテゴリーに本質的で普遍的な性質を帰せようとする)本質主義的实践と(そうした性質が社会的につくられてきたというよりはむしろ「自然な」ものとして存在すると主張し、それらの自然的秩序を変えることは出来ないし、変えるべきではないとするような)自然主義的实践を通じて、社会的・学問的な正当性を獲得してきた。こうした理由から、女性や非=白人の人々の「自然な」劣性に関する主張には異議申立てが行われるべきだという一般的な同意が、フェミニストと反=人種差別主義者の間に存在するのである。しかしながら、本質化された自然化されたカテゴリーのもつ力は、こうした単純な仮定よりもなお一層強固なものである。というのも、たとえこれらの特徴が劣性を意味するものでないとしても、まるで単純で自然な特徴であるかのように、あるいは社会的構築に先立ってすでに起こっていたかのように表出的ないしは遺伝子的属性を引き合いに出すことが、当たり前なこととして行われ続けているからである。人種差別と性差別は、こうした自然主義的な前提を築き上げることによってその力を維持している。そしてそれらは、(自然化されてきたことによって)あたかもそれ自体が自然に現前しているかのように思えるような——にもかかわらず、それらは社会的な選択に準拠しているのであるが——基準によってわれわれが人々をカテゴライズする際にわれわれが意味するところのものに対する根源的な異議申立てなくしては超克されることはないのである。そのような思考の一例は、「ジェンダー」は社会的に構築されたものであり「性 sex」は生物学的なものであるといったフェミニストのうちにも共有された本質主義的な観念であるが、今ではこれとても異議申立てを受けるようになってきているのである。

そういうわけで、正当性の基準としてと同様、周縁化の手段としても用いられてきた「性」や「人種」といった属性に無批判に言及することは、こうした社会的構築物に差異を定着させる継続的な手段として力を与えることなのであり、また性差別と人種差別がそれらの柔軟性を新たに公然と示すのを可能にしてしまうのである。たとえその誘惑が、政治的目的を達成するための手段として「戦略的本質主義」を持ち出すことであつたとしても(参考: Keith, 1991)、これは回避すべき畏なのである<sup>3)</sup>。戦略的本質主義は、以下の二つ

の理由によって失敗するべく定められている。すなわち、それが理論的には不可能なものとしてあること、そして、政治的には彼/彼女ら自身の言葉を用いては、人種差別や性差別と闘うことができないという点において、それが理論的構築物として用いられた場合、戦略的にはなく、徹底的に自然化されたかたちで本質主義の強化を招いてしまうような、諸カテゴリーの混乱に終わってしまうことだろう<sup>4)</sup>。本質主義のあらゆる形態は、新たな差異と分裂の形態を、これらの結束しなければならない人々の間につくりだしてしまう潜在的可能性を有しているのである。

本質主義への屈服は、また、さらにもっと都合の悪い政治的局面を有している。というのも、それは、それを通じて人種差別と性差別が非常にパワフルなものとなるように歴史的な抑圧形態を裏返しにした以外の何ものでもないものとなる可能性をもっているからである。われわれは、解放の手段としてではなく、かつてのあるいは潜在的な「抑圧者」に対して形勢を逆転させる手段として解かれた小さなスケールでのナショナリズムの悲劇的な結果を、世界各地(例えばボスニアやソマリア)で見ている。こうした状況は単に暴力を激化させるだけでなく、人種差別と性差別が十分に発生する条件=状態をもたらすのである。

戦略的本質主義にはさらなる危険が存在している。「集団が」、しばしば彼/彼女らに対する抑圧的な反動のなかで結果的に用いられるようになる集団アイデンティティを形成していく手段として本質主義を用いる当のプロセスを含めて、社会的集団の形成を理解することが困難な挑戦であることを覆い隠してしまうようなその利用法のなかに危険は存在するのである。対照的に「差異の政治学」は、「社会的存在にとっての極めて重要な側面」(Young, 1990, p. 163)として集団の強化・紐帯化・差異化が果たされるために、共通するものとして諸属性が生産されるその方法の理解を基盤としている。そういうわけで、集団の構成員の本質化された諸特徴を特権化することは、この社会的プロセスが生じる可能性の幅を限定してしまい、そして、調査研究される集団についてのわれわれの理解を狭めてしまうことにもなるのである。

しかし、本質化への衝動を抑え込むことは、多くの理由から、そう簡単にはできないはずである。それはたいてい、限定されない偶有性のある種のポストモダ

的な悪夢と見るような世界のなかで元気付けられている。それは短期的な政治的効力を有している。というのも、支持と感情をそれに対して再結集させる基準を、それが与えるからである。そして単純に言って、歴史からそれをこじりとるのは困難である。社会的構築物として、それは社会的現実を強烈に喚起する<sup>9)</sup>。さらに言えば、本質主義を超克するためには、一体何が本質化されているのかをはっきり理解する想像力 *imaginative power* がかなり必要である。これは歴史的懸隔に対するより一層寛容な企てなのである。

本質的でないものを想像することが難しいのは、それが、特定の社会的構築物を不明瞭なものにしてしまう自然化の傾向と混合されてしまっているからである。フィールドで調査を行う研究者に突きつけられた最大の説明要求のひとつは、人々が何を本質的で明白なものとして扱っているのか、そして異議申し立てされているのが何で、変化すべき対象とされているのが何であるのか、これらを解きほぐすことである。前者は、通常、明白である。というのも、それらは疑われないことのない「自然な」秩序の一部と仮定されているからである。もっとも厄介な概念は、しかしながら、自然化されているがゆえに、研究者も含めて誰もがそれらを疑わないようなこうした概念なのである。われわれが権利の問題を問う際には、本質主義と自然主義を超えて進む必要がある。つまり、行われるべきことは、それらが生産され助長されるまさにその場所において、それが社会的構築物であることを暴露し、それと切り結ぶことによって、諸言説がいかんか生産されまた継続し続けているかを理解することなのである。後に論じるように、これは大いに地理学的な企て *project* である。

さらに、政治的な成功は、それぞれが正当化されるため、新たな自然化の諸形態をつくりだしていく。このややこしくて皮肉な事実、社会的同定 *identification* のあらゆる形態（特に「人種」とジェンダー）を、それらを構築している抑圧に今後永久に勝利すべく固定化された集団としてよりも、むしろ一時的で解消可能な政治的連合と認識する、ノウルズとマーサー (Knowles and Mercer, 1992) が言うところの「政治的有権者 *constituency*」を確立させながら、状況を告発するための政治的闘争を制限するものに対する意義申立てへと向かわせる。いかにしてわれわれが学問的努力 *endeavor* とフィールドにおける政治的行為を結び付け

ていくかを再評価する際には、これらの諸点を考慮に入れておく必要がある。新たな問題は、「誰が誰とどのように語っているか」ということになる。

### フィールドに色をつける *Coloring the Field*

歴史を通じて、われわれは劣等で受動的で従属的な客体として自然化されてきたわけだが、現在、そのわれわれが人種差別や性差別の効力を超克しようと挑むことで、かえってわれわれ自身——またわれわれの母親や姉妹や友人たち——の経験の内部にジェンダーや「人種」という概念が自然化されてきたことを見出すに終わるとは、なんとも逆説的なことである。もっとも厳密な自己批判でさえ、コンテクストの状況を越えることは制限されている。自然化された言説は、単にわれわれがそれを通して世界を表象する分析的なレンズとしてだけでなく、(いやしくもわれわれが歴史をもち、社会秩序への結びつきを有しているのであれば) それを通してわれわれが世界にアプローチし、解釈し、表象=再現する知の条件=状況としても存在しているのである。そういうわけで、差異のポリティクスが、本質的なカテゴリーを超越し、それらの力 *power* の意味を崩壊させるような仕方フィールドに色をつけていく *coloring* のであれば、ことは効果的となるはずである。しかし、今日の変化が生じるどころの歴史的基盤は残されたままである。「(過去)の区分は現在においてもなおきつと生き続けている。だからアイロニーを後ろ盾にしてそれらと掛かり合い続けることが必要なのだ。さもなければ、それらがこしらえる抑圧的な状況がただ再生産されるだけだ」(Deane, 1990, p. 4)。

ということで、われわれは、ジェンダーや「人種」を通じて従属的諸関係を永続させる学問的伝統や他の社会的な伝統を脱自然化するだけでなく、またわれわれが自身の調査=研究を行ってきた脚本 *scripts* を非自然化していくような、新たなそして不断に変化していく批判的な学問形態を必要としているのである。両方とも、われわれが、ある未来のヴィジョンを想像し励ましていくために、ある種の「非本質的な言説」(Kobayashi and Peake, 1994) に訴えることを必要としている。学問的な批判と同様、社会変化のための圧盤 *platen* をもったアカデミックな研究者を供給し、この



二つの結合を正当化し確立していくのは、エリートの視角よりも、むしろ批判的な自己=反省の能力なのである。

しかしわれわれはまた、われわれが関心をもつ世界に住む人々への直接的な参与 engagement を必要とする。このことは私の調査対象者らが私の研究計画で一役担うことを意味するのではなく、むしろ私が彼/彼女らの一役を担うことを意味している。この参与のかたちは非常に多様であるし、方法論的にも、広範な情況の幅に応じて採られうるものである。しかし私は、どのような社会的学問であっても政治的行為から切り離しては存在し得ないものと堅く信じているし、私の研究が政治的であることを認め、それを社会的な変化のためにもっとも効率的なかたちで利用することに、個人的にのめり込んでいる。人種差別や性差別を分析することで、私の給料や多元的な社会のなかに私が参与する権利が十分に正当化されるとは考えない。私は自分の研究の根拠 basis として他の人々の闘争を利用してはいない。私は私の研究を私も部分的に参加している闘いの共通基盤 basis として利用しているのである。

私は「誰が誰について語っているのか？」という問題への解答が、われわれの実存 existence がどのような個別的な属性——どのような色、どのジェンダー、どのようなセクシュアリティ——によって正当化されてきたのかといった（比喩的に言えば）滑りやすい斜面の上においてではなく、むしろわれわれが抜き差しならず関与してきた歴史的基底 basis において、また、差異が政治的道具としてどのように構築され利用されてきたかを理解するという基底の上において得られるものであると論じてきた。このことは、どのようなフィールド状況であれ、無名のまま、中に入っていくことは困難であるだろうこと、及び、われわれがその政治的目的を確信するがゆえに、その変化のための闘いに一役買うことになるだろうことを意味している。しかしこのことは、それぞれ異なって構成された広範な諸集団への幅広い参与のかたちをわれわれが展開していくこと、また時間を経れば、どの特定の集団とであれ、われわれの関係が変化していくであろうことをも意味している。おそらく変わらないのは、言説的領野 discursive field すべてが権力との交渉と闘争の場 site であり、そしてフィールドワークを行うことのポリティ

クスが不可避免的にフィールドのポリティクスに直面するであろうという事実であろう。

## 注

- 1) 1942年と1949年の間におよそ26,000人の日系カナダ人が彼/彼女らの家郷から追いたてられ、抑留され、財産・自由・市民権を剥奪され、またある場合にはこの国から追放されたのであった。この人権虐待の認識のなかで、カナダ政府と日系カナダ人協会は1988年に補償に関する同意の折衝を行った。アダチ(Adachi, 1976)、コバヤシ(Kobayashi, 1987)、オオマツ(Omatsu, 1992)、スナハラ(Sunahara, 1981)を参照。
- 2) この問題は第一世界/第三世界というコンテキストに翻訳されるとなると一層重要なものとなる。
- 3) 戦略的本質主義という概念の言いだしっぺともいえるギャトリ・スピヴァックは、それが誤読されコンテキストの外で利用されてきたといい、この概念とは縁を切ったと最近マギル大学で語った。
- 4) この点に関する政治的分岐は広範で複雑なものである。「虹色連合 Rainbow Coalition」という着想=概念は、本質主義と抑圧のヒエラルヒーをつくりだす傾向の両方を超克することを意味している。同様に多くのアジア系アメリカ人は、ひとつの集団の価値を他の集団にあてがうため人種への選元を利用して分断しようとする支配的集団側の傾向に抗するために、「日系アメリカ人」「韓国系アメリカ人」等よりもむしろそのように（アジア系アメリカ人と）呼ばれることを好んでいる。一方で、例えば最近のアフリカの角（アフリカ北東部ソマリア付近）からの難民のようないくつかの集団においては「アフリカ系アメリカ人」とか「アフリカ系カナダ人」といったラベルに自らをアイデンティファイしたりはしない。彼/彼女らの世界は「エリトリア人」「ソマリア人」「ティグレ人」といったより意味深い民族文化的区分によってすでに境界づけられているのである(Kobayashi, 1993b)。
- 5) ここで私は、あたかも他のなにものかが存在するかのようには社会的構築物を「単に」社会的構築物に過ぎないものとする本質主義的な考え方を避けているのである。この立場はあらゆる社会的現実が構築されているとするものである(Vance, 1992)。

## 訳注

- 1) 人類学で盛んに言われている研究者の著者=権威性の問題、すなわち研究者が調査を行う場所というだけでなく、そこで不可避に巻き込まれる政治的状況、あるいは調査を行うことによって生み出される力関係など、調査・研究が行わ

れる現場、まさにそれ自体を構成している諸関係をめぐる問題を考慮に入れた上で、フェミニストとしての立場から、従来「現場 fields」を覆っていた「無色さ」（要するにマジョリティである白人による言説…そこでは人種差別や性差別が公然と行われてきた）に対して異議申立てを行い、そういった「無色さ」の（あるいは価値中立性とか距離を置いて対象に接することが可能だとするような）欺瞞を払拭するために、現場を「有色化」(coloring)していくといった極めて戦間的なマニフェストが本論の主旨である。

またタイトルの訳語の問題であるが、こうした理由からカタカナタイトルにしている。すなわち、カラーリングは「有色化」と訳すこともできるが、意識さえせずにあえてカタカナで残したのは、皮膚の色の差異だけに目が留まり、ジェンダーの差異やゲイ・レズビアンなどセクシュアリティの差異にまで関心が払われないことを恐れたからである。なおバランス上カタカナにした「フィールド」という語についても、それが研究調査を行う場という意味だけでなく、差異をめぐる闘争の現場ということも含意していることを強調しておきたい。

- 2) ゲイやレズビアンとは異なり、皮膚の色などから知覚可能なマイノリティの謂い。
- 3) 非=白人、女性、ゲイ、レズビアンなど、であるということ。

## 引用文献

- Adachi, K.(1976): *The Enemy That Never Was*. McClelland and Stewart.
- Brah, A.(1992): Difference, diversity and differentiation. In J. Donald & A. Rattansi eds., *Race, Culture and Difference*. Sage Publications and Open University, 126-48.
- Deane, S.(1990): Introduction. In T. Eagleton, F. Jameson, and E. W. Said, *Nationalism, Colonialism, and Literature*, University of Minnesota Press, 3-19. 増淵正史; ほか訳『民族主義・植民地主義と文学』法政大学出版局.
- Haraway, D.(1989): *Primate Visions: Gender, Race and Nature in the World of Science*, Routledge.
- Haraway, D.(1991): *Simians, Cyborgs and Women: The Reinvention of Nature*, Routledge.
- Hondagneu-Sotelo, P.(1988): Gender and fieldwork, *Women's Studies International Forum* 11, 611-18.
- hooks, b.(1992): *Black Looks: Race and Representation*, Between the Lines.
- Keith, M.(1991): Knowing your place: The imagined geographies of racial subordination, C. Philo comp. *New Words, New Worlds: Reconceptualising Social and Cultural Geography*, SCGS of IBG, 178-92.
- Kline, M.(1991): Women's oppression and racism: A critique of the "Feminist Standpoint", J. Voorst et al. eds. *Race, Class, Gender: Bonds and Barriers*, Between the Lines, 37-64.
- Knowles, C. & S. Mercer(1992): Feminism and antiracism: An exploration of the political possibilities, J. Donald & A. Rattansi eds. *Culture and Difference*, Sage Publications and the Open University, 104-25.
- Kobayashi, A.(1987): From tyranny to justice: The uprooting of Japanese Canadians after 1941, *Tribune Juive* 5, 28-35.
- Kobayashi, A.(1993a): Multiculturalism: Representing a Canadian institution, J.Duncan & D.Ley eds. *Place/ Culture/ Representation*, Routledge, 205-31.
- Kobayashi, A.(1993b): Representing ethnicity: Political statistexts, Challenges of Measuring an Ethnic World, *Proceedings of the Joint Canada-United States Conference on the Measurement of Ethnicity*, 513-25.
- Kobayashi, A. & L. Peake (1994): Un-natural discourse: "Race" and gender in geography, *Gender, Place and Culture* 1, 225-243.
- Lorde, A.(1984): *Sister Outsider*, The Crossing Press.
- McDowell, L.(1992): Multiple voices: Speaking from inside and outside "the project", *Antipode* 24, 56-72.
- Miles, M. & J. Crush(1993): Personal narratives as interactive texts: Collecting and interpreting migrant life-histories, *The Professional Geographer* 45, 84-94.
- Mohanty, C.T.(1991): Under Western eyes: feminist scholarship and colonial discourses, C. T. Mohanty, et al. eds. *Third World Women and the Politics of Feminism*, Indiana University Press, 51-80.
- Mukherjee, A.(1992): A house divided: Women of colour and American feminist theory, C. Backhouse & D.H. Flaherty eds. *Challenging Times: The Women's Movements in Canada and the United States*, McGill-Queen's Press, 165-74.
- Omatsu, M.(1992): *Bittersweet Passage: Redress and the Japanese Canadian Experience*, Between the Lines.
- Rose, D.(1993): On feminism, method and methods in human geography: An idiosyncratic overview, *The Canadian Geographer* 37, 57-60.
- Spelman, E.(1990): *Inessential Woman: Problems of Exclusion in Feminist Thought*, Women's Press.
- Spivak, G.C.(1988): *In Other Worlds: Essays in Cultural Politics*, Routledge.
- Sunahara, A.G.(1981): *The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians During the Second World War*, James Lorimer.
- Vance, C.S.(1992): Social construction theory: Problems in the history of sexuality, H. Crowley & S. Himmelweit eds. *Knowing Women: Feminism and Knowledge*, Polity Press & the Open University, 132-44.
- Young, I.M.(1990): *Justice and Politics of Difference*, Princeton University Press.